

桜前線

山桜

4月初旬、京都保津峡の山あいに常緑の木々に混じって山桜がひっそりと咲きだしていた。赤褐色の水みずしさを湛えた新芽と同時に開花する山桜は、絢爛たる華やかさはないが、やはり春の彩りの主役の一つとして趣が深い。

一目千本と呼ばれている吉野山の桜もシロヤマザクラが主で、下千本から始まり中、上そして奥千本へと咲き登って行く。昔の時代の桜はもともと疎かに静かに咲いていたという。桜の寿命は百年ほどしかなく、後世の人たちが献木し、脈々と植え継がれての今日の素晴らしい姿となった。

吉野の桜で象徴されるように、万葉の時代の桜はヤマザクラが主流であった。田峽に咲ける桜ただひと目 春にみせては何をかは思はむ』ひっそり咲く山桜に情感を込めて歌っているのもあれば、*あをによし* 寧良ならの京師 みやこは咲く花の薫うがごとく今盛りなり』という絢爛たるナラヤエザクラを詠っているものもある。次々と代変わりした山桜は、奈良から平

安への時代の暗闘と歴史の変遷を吉野の桜ともに見続けてきたことだろう。

日記や古記録ものによる京都の観桜の平均の日付を丹念に調べた結果では、最も早かった9世紀と最も遅かった一世紀とで一週間以上違うという報告がある。また二五世紀から十六世紀にかけての諏訪湖の結氷日の記録と史料綜覧などの古記録から見た桜の平均観桜日と古記録を比較して見ると、結氷日の遅れ進みが京都の桜の観桜日の遅れ進みとよく合っている。このように桜の開花は古気候の復元にも役立つ例は多い。

桜前線の北上

桜の種類はおよそ300種。日本のサクラも染井吉野、サメイヨシノ、桜が代名詞のごとくなっているが、これは江戸時代末期にオオシマザクラとエドヒガンザクラとの雑種として登場したのが始まりで時代は新しい。気象台では生物季節観測の条件を揃えるため、標準標準木を植えている。沖縄と北海道の一部を除いて主にサメイヨシノを標準木として東京で九段の靖国神社境内、札幌でも北海道神宮境内に植えられている。

三月末に九州南部から房総半島を結ぶ太平洋沿岸に上陸した桜前線は一日二〇キロほどどのゆっくり歩く速さで北上を始める。桜の開花予想を片手に京都の平安神宮では建物の朱色を反映しているがごとき、薄紅色のヤエベニシダレザクラの満開を見る。その足で吉野山へ桜と共に登るのもよい。高さ一〇〇メートルについて二、三日遅れの勘定で登れば、一気に挽回できる。信州高遠では残雪の南アルプスを背景としたコヒガンザクラを見るのも一興である。田の斜面に真珠を散りばめたよう』と形容されている新潟県の大峰山の 豫平 さちだいら サクラ樹林』という天然記念物の山桜も見てみたい。

桜前線の南下

桜前線は北上していくのが通り相場と想っていたら、沖縄地方ではヒカンザクラ（緋寒桜）の開花前線が山から里へ、里から南の暖かい島へと南下する。沖縄の八重岳から咲き初めヒカンザクラは十二月三十一日には標高一〇八メートルの宮古島では二四日となっている。なぜこのようなことが起こるのだろうか。

桜の開花には一定期間低温に曝された後に、

十分暖かくならないと咲かないというバーナリゼーション（春化作用）がある。ソメイヨシノの場合、日平均気温が5℃以下の寒冷経験と開花には10度以上の暖かい条件が必要となる。日本列島は南西諸島を除いて冬の気温は5度以下になる地方がほとんどなので、寒冷経験の条件は自然と満たされている。そこで気温の10℃の春の訪れとともに桜の開花前線が北上となる。

しかしながら沖縄地方では真冬でも開花の暖い条件はいつも揃っている。ヒカンサクラの低温条件は10度くらいでよく、いかにこの寒冷経験をするかが開花の決め手となる。冬の到来とともに標高の高い所でこそこの低温となり、時とともに里に降り、南の島々に南下する。その順番で蕾が寒さで育てられ、急いで開花して南下する。ふつう寒波は桜の開花を遅らせるのに、ここでは開花を促す格好となる。まさに逆転の論理で桜前線が南下するのである。

ヒカンザクラからソメイヨシノ、エゾヤマザクラにリレーされ最終の根室で開花するチシマザクラで終わる。海を渡ったロシヤでは、もう5月で、桜の花が咲いているが、庭は寒い」で始まるチエホフの『桜の園』が有名である。あ

けがたの冷え、零下3℃の寒さですが、桜の花は満開ですよ。どうも感服しませんあ、わが国の気候は。」と執事に嘆かせる。チエホフの桜は白い花が咲くサクランボの桜ではなからうか。日本のサクランボはセイヨウミザクラで輸入もので花は白い。ピンクの濃い色をした緋寒桜で始まった桜前線が淡い色のソメイヨシノを挟んで最終のチシマザクラの緋色で終わっている。加えて白い桜も可憐で別の趣がある。チエホフの桜を福島でみられるのではなからうか。

（気象大学校 村松照男）